

第19回原子力委員会定例会議議事録（案）

1. 日 時 2006年5月16日（火）11:30～
2. 場 所 中央合同庁舎4号館7階共用743会議室
3. 出席者 近藤委員長、齋藤委員長代理、木元委員、町委員
内閣府 原子力政策担当室
戸谷参事官、森本企画官、赤池補佐
日本原子力産業協会 政策本部
木下リーダー
4. 議 題
 - (1) 第39回原産年次大会の結果について（日本原子力産業協会）
 - (2) その他
5. 配付資料
 - 資料1 第39回原産年次大会概要（速報版）
 - 資料2 第18回原子力委員会定例会議議事録（案）

6. 審議事項

(近藤委員長) それでは、第19回の原子力委員会定例会議を始めさせていただきます。

議題は、第39回原産年次大会の結果についてお話を伺うことと、その他でございます。

よろしく願いいたします。

では、最初に議事録から、お願いします。

(戸谷参事官) まず、議事録でございますけれども、資料第2号で、前回の第18回の議事録(案)が出ておりますのでご確認をお願いいたします。

(近藤委員長) 資料第2号いかがでございますでしょうか。よろしゅうございますか。

(「結構です」と呼ぶ者あり)

(近藤委員長) それでは、お認めいただいたことといたします。

では議題。

(戸谷参事官) それでは、第39回原産年次大会の結果ということで、原子力産業協会の木下政策本部リーダーがお見えでございますので、ご説明をお願いします。

(近藤委員長) 原産大会終わったばかりでお忙しいところお越しいただきましてありがとうございます。

よろしく願いします。

(木下政策本部リーダー) 日本原子力産業協会の木下でございます。よろしく願いします。

本日は、若干長めで細かな字で恐縮ですが資料を用意いたしましたので、それをご覧いただきつつご説明をさせていただきます。

本日はこういったご説明の機会を設けていただきありがとうございます。

ご案内のとおり、日本原子力産業協会では去る4月26日から28日まで「わが国の原子力産業の基盤強化と再活性化――未来のために、今なすべきこと」ということを基調テーマといたしまして、横浜のパシフィコ横浜で第39回原産年次大会を開催いたしました。

大会のプログラムは、14ページ以降に書いてございますので、そちらをご覧いただければと思います。

この大会では、原子力委員の先生方にもおいでいただきましてまことにありがとうございます。

原産会議の改組・改革といたしまして、4月1日に原産協会が発足する状況での開催となりました。大会それ自体の位置づけとか性格というものは大

大きく変わるということではなかったのではございますが、新協会になってから初めてということで、これまでとは違った意味合いを持つ大会であったと私どもの方では考えております。

大会には、日本を含めまして、22カ国地域、3つの国際機関から政府の関係者、研究開発機関の方、電力、メーカー等、原子力産業界の関係者、あと大学関係者、一般市民の方、そしてマスメディアの方を含めまして約850名、うち海外から約90名でございますが参画をいただきました。原子力のOBの方も含めまして、市民の方は約70名が登録、参加をされたといった状況でございました。

この大会のプログラム編成に当たって簡単に触れますと、原産協会にかかわるといったコンセプトが原子力産業の基盤強化と再活性化にむけて行動をする団体を目指すといったことでもございましたので、この原産協会が多岐にわたる民間産業界の中核としまして、会員企業等を中心とする産業界関係者の一層の参画を促進することをこの大会の主眼といたしまして、産業界関係者の意見を中心に発表していただいて発信していこうといったことが今大会の1つの考え方でございました。もちろん、従来どおりオープンな大会ということで、一般市民の方々の参加も歓迎して、参加を促すといったことで運営に臨んだわけでございます。

それでは、大会の内容、発表につきまして、簡単ですがご紹介させていただきます。かなりございますので、手短かに各セッションごとにご説明をさせていただきます。

開会セッションでは、原産協会の会長としまして、西澤会長から所信表明に続きまして、松田大臣のご書簡の紹介を始め、松経済産業副大臣、政府幹部の方から原子力政策大綱の決定を受けての原子力政策推進の力強い決意のご紹介をいただきました。

次に、それに続く特別講演でございますが、海外の機関から5名の方からご講演をいただきました。そちらの様子が4ページから載っておりますが、特に5ページにございますように、特別講演の中でも、米国エネルギー省のビクター・レイスさん、GNEPのご担当の長官付の上級顧問という肩書きでございますが、レイスさんから国際原子力エネルギーパートナーシップの詳細についての講演がございまして、これが1つ関心を引いたところでございます。

この中で、GNEPの成功のためには、原子力技術でリーダー的な存在である日本の参加が不可欠であるといったことを、この場で強く期待を込めて話をしておられました。皆さんの関心を引いたところと思われまます。

その他には、IAEA、アメリカの原子力エネルギー協会、フランス原子力庁の方、それから世界原子力協会の代表の方からお話をいただいたということでございます。

次に、セッション1でございますけれども、5ページの下の方でございますが、こちらでは原産協会発足に関連する原子力産業界の方々を中心とした講演とパネリストという構成のセッションでございます。

ここでは、わが国の50年の原子力産業界の現状をレビューいたしまして、産業界の各セクターの代表が今後の原子力の発展にどう取り組むのか、決意表明を行っていただくとともに、その上で、この各セクターの方々が会員として参画する原産協会にはどのような役割を求めるのかという注文をつけていただくという趣旨のセッションでございました。

秋元氏から原子力全体に対する講演の後、原産協会を代表しまして、宅間副会長からその発足の経緯と原産協会の役割等の紹介をいたしました。

それに続きまして、各産業界の方に参加していただきましてパネル討論を行いました。ここでは、関係各セクターの方が、政策大綱の決定や関連する施策の展開を受けまして、取り組むべき課題を明確化してお話をいただきました。

官民の連携の下で、それぞれ原子力政策の遂行に適切に関与していくといった姿勢を改めて各パネリストから強調された次第でございます。

さらに、原産協会に対しての注文といったことでもございましたけれども、皆さんからの発表をかいつまみますと、特定のセクターの利益誘導にならず、常に公益法人として社会の利益を追求し、原子力への理解の底上げの促進をして欲しいですとか、原子力産業会全体の長期的戦略の策定等を行って欲しい。また、原子力産業の国際展開、海外との連携教育、情報の発信を促進して欲しいということが期待として出されました。

パネルで出された意見としましては、8ページでございますけれども、むしろ原子力産業協会というひとつのくくりを乗り越える時代なのかもしれない、そういうご指摘ですとか、あと原子力の関係者は原子力利用の哲学について悩んでおる、原産協会の方でその哲学というのを創出してはどうかというようなそういったところが大変大きな話でございますけれども、大きな期待も寄せられたといったことがございました。

次に、8ページのセッション2につきまして簡単にご紹介をいたします。ここでは海外のダイナミックな動きがある原子力の状況を幾つか紹介していただきまして、そういった世界の関係者から見た日本の原子力について期待等、またここでも注文といいますか、ここでもお話をいただくといった趣旨

でございました。

特に、今回、昨年あたりから関心が高まっておりますインドの原子力発電公社の社長さんをお招きしまして、直接インドの原子力発電計画についてお話を伺いますとともに、日本産業界からの参入への期待がメッセージとして講演の中から発せられたといったことでございます。

インド側からは、日本の産業界との人的交流を促進したいといった希望も今回表明をされております。

また、一方、IAEAの谷口次長からは海外の、国際機関から見た日本の原子力ということをお話をいただいたんですが、原子力をめぐる国際政治やビジネスで、日本の存在感が薄いですとか、または働きかけが弱いといった指摘もされておられました。国際的に顔の見える専門家の数を増やすこと、質の高い技術をもって存在を強めてほしいといったお話がございました。

次に、9ページ、セッション3、「世界最高水準の安全確保と更なる検査制度の改善の方向性」といったタイトルで規制問題に関係するセッションを取り上げました。原子力安全確保と検査制度の改善についてのパネル討論でございました。

こちらでは、規制当局の方、保安院長、また電気事業者、学識者、原子力技術協会の代表の方等で意見を交わしていただきましたけれども、やはりその中で議論として出ましたのは、現行の検査制度では書類第一主義であると。現場の方へそれをもう少し改善を進めて欲しいといったことですか、検査官の質の向上を強く求める現場の声も紹介されました。

一方、保守、管理高度化のために、状態監視保全を電気事業者が導入することの重要性などが指摘をされましたほか、あと検査の見直し、合理化、そういった検査の見直しが立地地域に及ぼす影響につきましても意見が出されまして、必ずしも検査見直しが合理化されて、それによって地域が経済的に例えば雇用の問題で、地域経済にマイナスになるといったことにはならないのではないかといったようなことが紹介されました。

こういったことにつきましても、地域に十分説明する必要については、関係者の方々が全員揃って十分な対応が必要であると考えているといったことが認識されておりました。そういったセッションでございました。

次に、最後のセッション4でございますけれども、こちらは11ページでございますが、これまでの年次大会のオーソドックスな形とは若干違ったセッションでございまして、セッションのタイトルは壮大なものでございますが、バラエティーに富んだ分野の方々から自ら原子力利用にかける夢ですとか、アイデアなどを十分に話していただくといった趣旨での試みのセッシ

ョンでした。

中でも、原子力による水素製造とその都市型社会での活用のシナリオを紹介されたり、ルネッサンスに近づくには、例えば生命科学分野で放射線利用の促進で社会に原子力に対する意識をもっと高めてもらいたいといったことが、原子力ルネッサンスに近づく一歩ではないかといったサジェスチョン等も原子力研究機構の女性の方から発表がございました。

以上が各セッションのポイントでございまして、最後に13ページにございますように、若干大会を総括いたしましてステートメントなるものも発表を今回いたしました。

大会での意見の発表を総括いたしまして、協会の今後の活動方針と照らして原産協会としての考え方を述べたものでございます。協会としましては、やはり世界の原子力の再生への道を前進しているということが明らかになったということの認識のもと、国際連携の動きが明確になってきていることを注目すべきと考えて、そういったところに産業界としての積極的な対応が必要なのではないかと考えているところでございます。

こちらにつきましては、原産としましても、公益法人として常に社会貢献を旨とし、産業界、研究機関などの力を結集して、推進の原動力となって参るといったこと。安全と信頼性の追求、地方自治体等との情報交換、密接な関係を保つ、放射線利用等の重要性を訴えたと、そういったことを会議の方針として明確にさせていただいたということでございます。

最後に、サイドイベントとして開催した学生セッションというものでございまして、やはり学生、次世代、ルネッサンスを担うべく若い方々の、こういった原産大会とか、こういった社会と原子力との接点の場で、もう少しかわりを持っていただければということで、日本原子力学会の学生連絡会が音頭をとりまして、それに原産協会が協力をしたという形で行われたものでございます。産業界と学生とのコミュニケーションの場となったと認識をしております。

以上が、内容のご紹介でございます。

(近藤委員長) はい、どうもありがとうございます。

それでは、ご質問、ご意見ございますでしょうか。

町委員。

(町委員) これは、原産協会の将来を論じたパネルの中で放射線利用の推進についても検討し、発信して欲しいという意見が特記されていますよね。これは、私も大事なことだと思っているんですが、実際には例えば原産大会の中でも、放射線利用が全く取り上げられてない。かつてはアイソトープ・放射

線会議を原産がやっていたけれども、今はやっていないので、新しい原産協会が放射線利用についてどういうプログラムをやっていくかが大事だと思うので、その辺をよろしく願いしたい。

国際協力も、各国の人に来てもらって大会で話してもらおうというのは、インドも含めて情報を得ることは大事だとは思いますが、さらに日本がマルチとバイの国際協力にどういう役割を果たしていくべきか、日本のリーダーシップをどう発揮していくのか、FNCAはその一つの例だと思いますが、そういう議論がなされるべきだと思います。勿論国も検討しておりますが。
(近藤委員長) 木元委員。

(木元委員) 本当にお疲れさまでした。協会になって初めての開催ということで、私は伺えなかったんですけども、今ご報告いただいたり、いろいろな方のご意見を伺ったりして、それなりに評価をいたしますが、それ以前の問題かもしれませんけれども、新しく原産協会になってから期待していたのですが、例えば理事の構成も男の方ばかりですよね。肩書きでそこに入っているという感じで、何かそのあたりに新鮮さが感じられないという印象があります。

ですから、以前のほうがいろいろな意見がそこに入ってきて、様々な視点で申し上げる機会があったんですけども。今回は松大臣が女性です。それから、アンジェリーナ・ハワードさんがいます。あとの方になって、さっきちょっとおっしゃった石岡さんのご報告があった。何かもう少し新鮮で、ワイドな視点でというか、一般市民を巻き込んだような形での原産協会の会議が持てないかなというのが、申しわけないんですけども、外から見た場合の率直な感触なんですね。そこのところ、これまでの形式にこだわらず何かもう少し工夫できないかなと。

今、町先生もちょっとおっしゃったけれども、外から見たら、いろいろ盛りだくさんに見えるけれども、何かコップの中で固まっていないか。そこに新鮮な意見を発信できる機能を持った人が何人かいれば随分違うだろうなという思いがあります。

(木下政策本部リーダー) 実際に、大会中にもご意見を伺う機会がございまして、例えば特にIAEAの谷口次長は、随分内向きになってしまって、バラエティー性に欠けているのではないかとといったこともご指摘がありました。あとやはり一般に参加されている方からも同じような構成、カテゴリーが同じような方ですと、やはり意見の発信にバラエティーがないし、ちょっともう少し考えてもらいたいといったことは実際に率直なご意見としてありました。また、これから次年以降も続く大会でございまして、それをぜひ踏ま

えて企画してまいりたいと思います。

(木元委員) そうですね。同じような考え方の人の集まりの討論会というか、場のディスカッションというのは、もう広がらないんですね。だから、何かワイドな視点から突っ込む人がいないと、展開できない。原子力をより深く知るために必要だと思います。

(木下政策本部リーダー) 実際、今回産業界を若干意識したというところがございまして、こういった構成になりました。これが、場所が東京以外で行うですとか、また立地地域の場合は、地域の方を含めてですとか、またバラエティーに富んだ、それに応じたプログラムにしてまいりたいと思っております。その意味では、今回大会で得られた教訓を次回以降につなげてまいりたいと思います。また協会の活動としては、今先生におっしゃっていただいたようなことも含めて、この大会から協会の活動につなげていくものをまた夏ぐらいを目処にまとめて、それを実施していくといったことが重要だと考えております。

今回は、産業界的になったこともありますので、それでは、今回内容がこうだったということを立て地域の方も含めて社会に発信するような情報提供を積極的にまた工夫していかなければいけないということは感じておるところでございます。

(近藤委員長) はい、齋藤委員。

(齋藤委員長代理) 要するに、原子力産業会議から、原子力産業協会に変わられた理由というのは、恐らく会員各位にとっては、やはり今までの産業会議が転換期に来ているのではないかとということで変わられたんだろうと思うんですね。それで、かたや電気事業連合会、電機工業会もあり、そういう中で、原産協会としての独自性をいかに発揮するか、会員の声に応えるためにどうすれば良いか、というのが問われていて、そのためのセッションも設けられた訳ですね。

それで、原産協会に求めるもの、いろいろなことをおっしゃっているんですが、50～60人と職員数も限られているところ、あれもこれもと言われてもなかなか対応し切れないのではないかと。その中で、今回の大会を通して、皆さんの意見を伺って、新しい原産協会として、こういうことをやれば会員の方にも役に立ち、一般の人、あるいは世界に向けて役に立てるんだという道が見えてきたと思ってよろしいですか。

(木下政策本部リーダー) これは私の個人的意見になりますが、やはり五百の会員機関の方々、それぞれの、例えばこの中で電気事業の方、メーカーの方もいらっしゃるわけですが、それこそいろいろお考えが、同じ会員としても

いろいろな会員の方がございますので、ある意味、会員同士の利害が一致しないようなところもございます。それを最大公約数的にやっていくのはなかなか大変な作業だと思っておりますけれども、それはそれとして、会員の十分な意見をまず聞くといった姿勢、それからそれを踏まえたニーズに基づいて、実際の毎年度の活動をしていくといったことをこれまで以上に、そのプロセスを大事にして活動していきたいと思っております。まずはそれが重要かと思っております。まだ発足したばかりで、まだ試行錯誤的のところはあろうかとは思っておりますが、協会として一丸となって進めていくことが重要かと思っております。

(齋藤委員長代理) ぜひ、新しい原産協会ならではのということで頑張ってくださいとすることが大事だろうと思っております。

(木元委員) 今、おっしゃったことですからけれども、総花的になってしまうのですよね。

(齋藤委員長代理) そう、総花的にならないように。

(木元委員) 目を内に向けて、総花的に揃えているでしょう。そうではなくて、ここの副題に書いてあるように、「我が国の原子力産業の基盤強化と再活性化、未来のために今なすべきこと」。これだけにガンと絞って、外国からは、2、3人、基調講演をしていただくとしても、本当にポイント、ポイントできちんと押さえて、そしてがんがんやる。同じテーマで何部かに構成して、継続してやる。NHKも、昨日小泉改革がどうだったかという評価を2部構成で延々とやっていましたよね。ああいうような感じでやっていけば、かなり突っ込めると思うのです。新しい協会はこういう心構えなのです。こういう試みを今回はやってみましたという、そこが見えない。かつてやってきたフォーマットを単に踏襲しているような気がして、それをぶち壊すことから始めてもよかったかなと。

(齋藤委員長代理) いや、あまり外野が申し上げることではないのですが、セッション報告もありましたので、遠慮がちに申し上げました。

(木下政策本部リーダー) 実際に今度は来年は第40回という記念大会といいますか節目の大会でもございますので、先生方からもいろいろご意見をいただきつつ一層よいものにしていきたいと思っております。

(近藤委員長) 今日は、年次大会のご報告をいただいたのであって、原産協会のあり方についてご報告をいただいたのではないのですから、後者についての質疑は抑制したいと思います。この大会自体がこの場を借りて、原産協会のあり方についてご意見いただいたということで、そのことに触れざるを得ないのですが、それは年次大会でやる話ではないのではないかと考えるところ

ろ、このことはこのくらいにしたいと思います。協会の悩みをここで聞いて欲しいということなら、時間を改めてちゃんと聞きますので。今日は年次大会で現在の世界の内外の原子力産業を取り巻く状況について、スナップショットとしてどういう認識を得たかと。国と民間についてどういう役割が提起されたかということをご報告いただいたということで、終わりたいと思います。委員各位は、原産に対していろいろお思いがあるから、それがプレゼンで刺激されて噴出したのは当然とは思うのですけれども。

(木元委員) 思いというか期待感があったわけですね。

(近藤委員長) ええ、ただ、それは別にした方がいい。原産協会頑張っただけという話は、また別の機会にちゃんとやりましょう。

(木元委員) やり方として、一番最初の谷口さんがおっしゃったようなことです。

(近藤委員長) 大会についてのご報告に関して私の意見を申し上げていないので、それを締め代りに申し上げますと、この大会がかつてのように、世界の原子力関係の行事として、カレンダープレスメントなされるべき大会に設計したんですかという感想があります。

外国人の話聞くのではなく、国内の問題を議論する場なんだということなのか。いや、国際展開していく産業界の将来について議論するための大会なのか、そこの切り分けが不明です。世界からはインターナショナルなフェイス・トゥー・フェイス、コンタクトできる場と思って来る人もいますから、それが変わったのなら変わったとメッセージを送らなければならない。そこがやや曖昧のままにやや内向きになっている気味がある。そういう国際性があるということで韓国原子力産業会議の大会と週を変えてやることになっているんだけれども、もう、あっちへ行って、こっちへ来ないという人が出てくるようなことになっちゃってもいいということなのかもしれないが、私としてはそうであってはならなくて、アジアにおける世界の主要な産業界の人々の集まる会合にしていくべきだと考えるのですが、そういう根本的なプログラミングの問題があったのではないかと思いました。

しかし、会合自体は密度の濃い議論がなされた良い会合のようですから、その成果については委員会としても活用させていただきたいと考えます。

今日は、ご報告ありがとうございました。

それでは、ほかに、その他議題。

(戸谷参事官) その他議題、特にございませんけれども、日程的な点で申し上げますと、次回の原子力委員会の定例会議は、23日火曜日、10時半からでございますけれども、場所が通常と違いまして、7階ではなく6階のお部

屋で、会議室の確保の関係でそのようになっておりますので、ご注意をお願いいたします。

(近藤委員長) 先生方からは何か。よろしゅうございますか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

(近藤委員長) それでは、今日はこれで終わります。